

## カフカスの大地を訪ねて - 2006 年夏

### 序

「カフカス（コーカサス）」の大地。地図で見れば、黒海とカスピ海に挟まれ、カフカス山脈の南北に広がるわずかな地域に過ぎない。しかし、はるかローマ帝国の昔から、文明・民族の十字路としてあり続け、幾多の紛争の舞台となり、現在もチェチェンをはじめとした紛争が続いている地である。2006 年の夏、この地域を巡検する機会を得た。人々がこの地に魅了される理由を肌で感じたい。そんな思いを胸に、この旅に出発した。

### 1 アゼルバイジャン - オドラル・ユルドゥ（火の国）へ バクー市内

カフカスでの第一歩は、モスクワ経由でアゼルバイジャンの首都バクーに印した。カフカス諸国は、旧ソ連邦の構成国であり、空の便もモスクワが中心となっている。無論、日本からの直行便はない。バクーのピナ空港には午前 3 時に到着。静けさが漂う空港から、バクー市街のホテルまではおよそ 30 分。さして大きな明かりがあるわけではなかったが、所々にあるガソリンスタンドが目立ち、石油に恵まれた国情を感じさせる。

ホテルで 3 時間程の仮眠をとった後、アテシュギャーフの拝火教寺院へと出かける。朝のラッシュ時のため、街には活気があり、道路端には人々が立ち、多くの車が行き交っている。途中すれ違うマルシルートカ（乗り合いタクシー）には、どれも狭い車内いっぱいになり込んでいた。

アテシュギャーフの拝火教寺院の周辺には、古いタイプの油井がまさしく林立しており、油井群の中にこの寺院や家々が建っているといった雰囲気である。拝火教は、イランからこのアゼルバイジャン一帯に広まった宗教だが、かつての寺院の数は、圧倒的にアゼルバイジャン領内が多いという。寺院は、天然ガスが自噴して自然発火しているところに建てられたというため、いかに自噴箇所が多かったかがわかる。まさしく「火の国」だ。現在、この寺院では自噴しておらず、観光客が来ると一回 10 ドルで都市ガスのバルブを開いて火を点けてくれる。多少興ざめする光景だが、往時を偲ぶことは可能であった。



復元された拝火教寺院



バクー油田 乱立する油井

他日、マンマンディも訪問したが、ここは、今も天然ガスが自噴し、自然発火しているところである。荒野の真ん中にあり、マンマンディを示す看板がなければ、その存在に気がつかないような場所だ。が、それがかえって、かつての光景を思い起こさせる。数十メートル先からでも感じられる熱気は、拜火教の興隆を十分頷かせるものであり、火に対する畏敬の念を感じさせるに十分な見学地であった。

バクーでは他にも、世界遺産となった旧市街や、シルヴァン・シャフ・ハーンの宮殿、ゴブスタン岩画群の見学などをおこなったが、何といても、カスピ海とその油田群の見学が印象深いものであった。

カスピ海は、いうまでもなく世界最大の湖である。面積は日本とほぼ同じ。流出河川は一本もないので、蒸発量と流入量がほぼ同量ということになる。ボルガ川など大川が流入していることを考えれば、その蒸発量の多さがうかがい知れる。聞くところによると、かつては旧市街が湖に接していたとのことで、水位は低下しているらしい。カスピ海が、アラル海のようにならないという保証はないようだ。水質汚染も深刻な問題になっているとのことである。

バクーといえば、油田のイメージがすり込まれている。残念ながら設備に近寄っての見学は無理であったが、カスピ海湖岸から、最新の油井や、グルジアを経て地中海に通じるパイプラインのターミナルを眺める。油田とターミナルは巨大で、厳重な警備がなされていた。ターミナルは、アゼルバイジャン軍と米軍が交代で監視しており、カスピ海油田の重要性や、利権争いの熾烈さが見てとれた。

## 2 シルクロード残照 バクー ~ シェキ ~ グルジアへ

バクーを離れ、アゼルバイジャンの内陸へと歩を進める。荒涼とした草原が広がり、乾燥気候であることを示している。内陸に進むにつれて、徐々に緑が増えていく。遠くに山脈を確認できるようになり、バクーやゴブスタンで見慣れた乾燥大地とは異なる景色が広がりだしてくる。見えてきた山脈はカフカス山脈だ。雑木林と草地や小川の風景が続くその中に、トタン屋根の粗末な家々が点在しており、この国がまだまだ発展途上の国ということを実感させられる。バクーのような都会と、地方の格差はかなりのものらしい。石油産出国らしく、村々には必ずアンバランスなガソリンスタンドがあった。

バクーからバスに揺られること数時間。内陸の街シェキに着く。シェキは、古い田舎町の風情がよく残っており、気温もカフカスの麓のせい、幾分涼しい。これまで、乾燥した大地とガソリンスタンドしか目に入らなかった光景からすると、ようやくシルクロードの面影を見た気がした。町のもっとも奥にはハーンの宮殿やキャラバンサライ(隊商宿)がある。

宮殿は、外壁や内部とも至る所が極彩色に彩られ、ステンドグラスを通した光が、それらを照らし出し、何ともいえない雰囲気醸し出していた。乾いた石の建物や、トタンの屋根に慣れた目には、極めて美しいものとして映った。かつてのハーンの財力がい

かなるものであったか、まざまざと見せつけられた気がした。

キャラバンサライは、復元された部分も多いだろうが、中庭を囲むように居室が並び、その静けさとともに、ここに荷を解いた隊商たちの憩いの空間を感じることが出来た。常に死と隣り合わせのかつてのシルクロードの旅において、キャラバンサライの果たした役割を肌で感じる事ができたような気がした。

シェキの隣町に一泊して、さらに西へと進む。緑も豊富になり、「トビリシ」と読める標識が出始めた。気がつけば、ごくまれに十字を載せた教会が見られるようになってくる。グルジア正教会である。この教会が、グルジアが近いことを知らせてくれる。アゼルバイジャン最後の町を出ると、20分程で国境までたどり着く。日本人にはなじみのない陸路での国境越えだが、検問がなければ、何の変哲もない橋に過ぎない。しかし、この何の変哲もない境界が、アゼルバイジャンとアルメニアの間で、紛争の火種となっているのだ。改めて、国境の重みを痛感させられる。

国境を越え、バスを乗り換えて、一路ワイナリーを目指す。途中の峠道から、眼下に綺麗な路村が見えた。緑も豊富で、ワインの故郷といわれるのも頷ける。グルジアワインは、世界最古のワインの一つで、最古のブドウ原種がこの地方から産出されたという。アゼルバイジャンとの国境の街ツォドナから1時間程で、国営のワイナリーに着く。地下の貯蔵庫は、ひんやりとした空気に包まれ、その中に古いものでは1813年産のものから、最近に至るまでのワインが並べられている。が、ここへ来て気がついたのは、銘板が読めないこと。アゼルバイジャンではアルファベットであった文字が、グルジア文字になっているからだ。独特の曲線は、何となく歴史の古さを感じさせた。道すがら見られたブドウ畑と、遠くに見えるカフカス山脈の眺めは、何千年も前から変わらぬ光景として存在していたのであろうか。かつての隊商たちと同じ光景を眺めていることを想うと、静かな感動を覚えた。

テラヴィというグルジア東部の中心都市に一泊し、マルコ=ポーロが「絵のように美しい」といったグルジアの首都トビリシを目指す。峠を越え、しばらく走っていくと、バスの前方に山麓に沿った大きな町が見えてくる。トビリシである。町の中心を流れるムトゥクヴァリ川に沿った町並みは、建物の劣化は目につくものの、綺麗な町並みで、マルコ=ポーロの言葉も頷けた。ひとまずトビリシを通過して、グルジア正教の聖地ムツヘタへと向かう。



カフカスの夜明け



グルジアの路村

### 3 聖と俗の狭間で ムツヘタ～ゴリ～トビリシ

ムトゥクヴァリ川に沿って 20 kmほど進むと、ムツヘタの街に着く。ムツヘタは人口 7,600 という、こぢんまりとした地方の町という印象であるが、町全体が世界遺産に指定されているグルジア正教の聖地である。カッパドキアにいた修道女、聖ニノがこの地に教会を建てたことから聖地化したところだが、紀元前 3 世紀から紀元 6 世紀にこの地方に存在したイベリア王国の首都だったところで、その点からも正教だけでなく、グルジアの心の故郷ともいえるだろう。

その中心、スヴェティツホヴェリ大聖堂は、11 世紀に再建されたものである。これまで見かけたグルジア正教の教会のどれよりも大きく、迫力のある聖堂だ。ヨーロッパに見られる装飾の施された聖堂とは対照的な、シンプルで飾りの少ないものだったが、力強さを感じとることの出来る大聖堂であった。他にもジュワリ聖堂などを見学したが、ムツヘタは、グルジアの人々の信仰の深さ、力強さを感じさせる街であった。

トビリシにて次いでゴリへと向かう。ゴリは、ムツヘタから西へ 40 km。丘陵地帯の真ん中に位置する中都市である。この取り立てて変哲のない城砦都市を有名にしたのが、ヨシフ・スターリンである。ゴリは、この旧ソ連の独裁者の出身地として、その名を世界に知られることとなった。この町には彼の博物館が作られていて、市庁舎に次ぐ立派な建物である。内部は彼の生い立ちから権力掌握までの道筋や、二次大戦の際の様子、社会主義国家とのつながりを示す物品などが展示され、その権力の大きさを物語っていた。庭先には、彼の生家をそっくり展示したものや、彼が使っていた貴賓車が展示されていた。世界的有名人の生家というのはとかく粗末なものが多いが、ここで見たスターリンのそれは、ひときわ粗末で、このことが彼の独裁者への道の原動力の一つとなったのかと思うと、何となく頷けなくもない。貧困が、ブルジョワや貴族階級への反抗心につながったとすれば、共産主義の権化のような存在になる土台が、ここにあったということになるのだろうか。ゴリの人々の、スターリンに対する気持ちは複雑だという。地元の有名人は、誰しもひいき目でみたいものだが、そうとも言えない現実。ゴリには、そんな空気が漂っていた。

翌日、トビリシの市街見学を最後に、グルジアを後にした。ムトゥクヴァリ川に沿ったトビリシの町の南端に、旧市街が存在する。南端の丘の上からは、トビリシが一望できるが、グルジア正教、アルメニア教会に混じって、ロシア正教、カトリックの教会、モスクまでが眺められた。「宗教のるつぽ」といった観もあるが、この地の人々の信仰心の強さを感じさせられた。グルジアで見た、聖と俗の狭間に生きる人々の姿。グルジアの大地は、それら全てを受容するかのごとく静かに広がっていた。



トビリシにて

#### 4 失われたもの ハフパト～セヴァン～エレバン

グルジアから、アルメニアへの国境越えも、トラブルなくスムーズにすんだ。国境を越えて最初の訪問地は、ハフパト修道院。河川が大きな峡谷を作り、その谷間から、上部の平坦な面までは急な坂道が通じている。修道院があるのもこの平坦面であり、バスがやっと一台通れるような細い道を進んでいく。修道院の建物は、一見するとグルジア正教会のそれと大きくは変わらず、石造りで質素な作りである。アルメニア教会独特の石に十字架を刻んだハチュカルがそこかしこに立っている。かつて修道士たちは、修行の一つとして、一生涯をかけてこのハチュカルを刻んだということである。至る所にこのハチュカルが立っており、いかに多くの修道士がこの地で修行に打ち込んでいたかがうかがえた。

ハフパトを出て、ヴァナゾルという北部の中心都市を抜けて、セヴァン湖へと向かう。ヴァナゾルは 1988 年のアルメニア大地震で壊滅的な被害を受けた町である。この地域は、カフカス山脈に代表されるように新規造山帯の一角であり、地震地帯であることを実感させられる。このあたりは、これまで見てきたどの地よりも緑が多くなっていたが、一つの峠を境にその風景は一変する。その変わり方は想像以上であり、まさに別世界であった。山々は緑から、所々山肌がむき出しの山となり、森林も激減する。そんな光景の中、遠くに青い水面が現れてくる。セヴァン湖だ。「青い真珠」といわれるとおり、琵琶湖のおよそ二倍の湖面に満々と水をたたえ、青く輝いていた。回りの山肌の茶色の中で、よりいっそうその青さが目立っている。ソ連時代の発電所建設によって水の流入量が減り、湖面が最大 12 メートルも下がってしまったという。そのため、かつての湖面を基に作られた景色の多くが失われてしまったとのことだが、その湖面は、今でもそれを補ってあまりある美しさを保っていた。



ハフパト修道院



セヴァン湖

しばらくの散策の後、アルメニアの首都エレヴァンへと向かう。セヴァンからエレヴァンへは、草原の中の一本道をひた走る。かなり遅い時間にエレヴァンに着いた。

エレヴァンは、アララト盆地に広がる人口 106 万の古都だ。その起源は紀元前 7 世紀にまでさかのぼる。この町で目を引くのは、なんとといっても標高 5,123 メートルのアラ

ラト（ビュックアール）山である。旧約聖書ではノアの箱船が漂着した山といわれ、アルメニア人にとっての聖地である。山そのものは、成層火山で、極めて美しい山容だ。このアララト山をより間近に見るために、エレヴァンの南、およそ 30 kmにあるホルヴィラップ聖堂を訪ねる。エレヴァンの市街地をぬけて田園地帯にはいると、遮るものがなくなるため、山容がよく見えるようになる。富士山という成層火山に親しんでいる日本人には、その神格性を理解しやすいと思う。かつて、アルメニア王国はこの山の周りに発展し、その栄華を誇ったという。ビザに押された国章の中心にも、この山が描かれている。この聖地に最も近い聖堂が、ホルヴィラップである。アララト山から 30 kmほど離れたところにある小高い丘の上に立つ聖堂だが、これ以上、山に近づくことはできない。それは、この山がトルコ領になっているからである。聖堂の建つ丘のすぐ南側はトルコとの国境で、アルメニア人には訪れることの出来ない、いわば「失われた地」となっているのだ。このような状況であるため、アララト山を最も間近に見ることのできるこのホルヴィラップの聖堂を訪れるアルメニア人は、後を絶たないという。ホルヴィラップからの帰り道にアルメニアの名産品であるブランデーの工場を見学したが、ここの社章もアララト山であった。

翌日、アルメニア教会の聖地、エチミアジンへと向かう。アルメニア教会は、カトリックやプロテスタント、東方正教会とも違うキリスト教の一派で、コプト教やシリア教会と同じ一派である。301年にキリスト教を国教に定めたというから、その国教としての古さに驚かすにはいられない。まさしく、世界最古の国教化である。エチミアジンは、そのアルメニア教会のいわば総本山であり、アルメニア教会のヴァチカンともいえる。

エチミアジンの大聖堂は、シンプルなつくりではあるが、その大きさと力強さは、やはり聖地に建つ聖堂のそれであった。宝物館には世界各地のキリスト教会から送られた宝物が納められ、ビザンツ皇帝や、ローマ教皇から送られたものも多くあり、歴史の重みを感じられた。



**アララト山**



**エチミアジン**

エチミアジンを訪ねた後、ガルニ神殿とゲガルト修道院を訪れた。ヘレニズム様式のガルニ神殿は、ギリシャのパルテノン神殿を小さくした形であった。周囲には、ローマ

の浴場と同じ作りの浴場の跡もあり、この地が、ギリシャ・ローマとの結びつきを持った地であることがよく分かる。ゲガルト修道院は、石をくりぬいた洞窟が広がっており、その中に修道院の本体があった。いくつもの居室が作られ、それぞれに祭壇がもうけられていたが、祭壇にはイスラームや仏教の影響を示したものもあり、アルメニアの地が東西の文化の融合地点であることを感じる事ができた。

この旅の最後に、エレヴァンの町を遠望した。美しく穏やかな町並みがそこに広がっていた。ソ連崩壊から20年近くたった今、ヨーロッパの資本の下、徐々に整備が進められている現状が見てとれた。しかし、その穏やかな光景の裏には、聖なる山や国土の大半を、大国との紛争の中で失っていったという歴史がある。歴史博物館では、アゼルバイジャンやトルコとの紛争の歴史が示されていた。アゼルバイジャンとの紛争は今も、ナゴルノ＝カラバフ問題として継続中である。東西文化の接点という要衝に位置することと、それらの問題は無関係ではあるまい。大国に翻弄され、民族が入り乱れた長い歴史を感じる事ができたアルメニアの旅であった。

## **結 民族の十字路を旅して**

カフカスが人々を魅了し続けるのはなぜなのか。この問いに対する答えが、旅を通しておぼろげに見えてきたような気がした。この地域が、昔も今も民族や文化が交錯する十字路であり、それ故に紛争の火種を抱えていることを、身をもって感じた旅であった。しかし、いかなる紛争の荒波の中でも、自分たちの生活を守り抜き、いつの時代も平和に生き続けようとするカフカスの姿、どんな荒波も乗り越え受容した先にある、何事にも動じないカフカスの人々の強さを感じる事ができた旅でもあった。それこそが、長年人々を魅了してやまないカフカスの魅力なのではなからうか。

(H.T)